ギリシャ小泉八雲没後110年記念事業を終えて

未来へ紡ぐ創造の精神

故郷と日本 つなぐ文化

――小泉　凡

7月4日午後5時、アテネから6時間をかけて、3台のバスに分乗した60人ほどの日本人がレフカダに到着した。これから始まる記念事業に参加する人たちの一行だ。この記念事業では三つの目玉があった。

レフカダ文化センター内に「ラフカディオ・ハーン・ヒストリカルセンター」、すなわちヨーロッパ初のハーン・ミュージアムがオープンすること。国際シンポジウムを開催し、ハーンの「オープン・マインド」の意味を、日本・ギリシャ・アイルランド・マルティニーク出身の9人のパネリストにより検証すること。そして佐野史郎・山本恭司による朗読ライブ「望郷―失われることのない永遠の魂の故郷―」と熊本県山都町に伝わる人形浄瑠璃、清和文楽による「雪女」の初のレフカダ公演を行うことだ。

4日にオープンしたミュージアムは、レフカダ市が提供した2部屋をリフォームし、壁面に解説パネルや写真を展示。展示ケースにはタキス・エフスタシッさんから寄贈されたハーンの初版本や日本のハーンゆかりの地の自治体や団体、小泉家が提供した遺品や原稿のレプリカが陳列された。

ボランティアでアテネから何度も足を運び、展示を仕上げたマリア・ゲネツァリュウさんは国立ギリシャ銀行の学芸員で14歳からハーンを愛読している。マリアさんなしではミュージアムはオープンできなかった。ティー・ソルウさんもハーンの愛読者で、記念事業の直前に『怪談』『骨董』『日本雑記』のギリシャ語訳を出版し、オープンに弾みがついた。

ハーンは「世界が必要を感じているのは、古代ギリシャの幸福と優しさの精神の回復」と述べるほど古代ギリシャへの憧れを抱いていた。シンポジウムに先立ち、筆者がハーンの「オープン・マインド」の熟成過程とその文化背景をスライドショーで示した。

その後、2日間にわたって「教室のオープン・マインド」「流浪と探求の旅」「想像のギリシャ」「再話文学の世界性」「トランスナショナル」「仏教」「エグゾティシズムと文化越境」「文化的アイデンティティー」「ゴシック・ホラー」という多様な切り口からハーンのオープン・マインド形成の軌跡にアプローチがなされた。

座長を務めたアラン・ローゼンさんの結びの言葉からその要旨を紹介する。文化的境界の曖昧な地点に立ち位置を置くハーン。怒りも偏見もあったが、それを認めつつ彼は新たな創造を模索する好奇心を持ち続けた。それこそが彼のオープン・マインドの源だ。そして、常に新しいものへの可能性があることを現代の子どもたちに伝えるべきだ。

参加した複数のパネリストから「こんな創造的なシンポジウムに参加できて感動した」という言葉をいただいた。半年にわたり、松江で世界のパネリストとの調整役をしてこられた長岡真吾さん（島根大学教授）の尽力がシンポジウムの成功に大きく貢献した。

5日の朗読ライブは、イオニア海に日が傾く、午後9時半から野外劇場で始まる。佐野史郎さんと山本恭司さんは、ハーンが日本時代の幸せな時間に紡いだ作品を故郷レフカダと母ローザの魂に報告するという思いで臨んだという。実に感動的な公演だった。英語とギリシャ語の字幕スーパーも観客の理解を助けた。最後にスタンディング・オベイションとなった。言葉の壁を越えて観客の心に響いたのだ。レフカダ市のアラバニス市長は、永いレフカダの歴史の中で、こんな画期的なイベントは初めてだと語った。

翌日の清和文楽でも日本文化の奥深さが観客の心に届いた。朗読ライブは7日にコルフ島でも開催。他にも、この記念事業では中村寿男氏らによる茶と松江の文化紹介、アテネでは西林大使公邸でのレセプションやアメリカン・カレッジ主催のイオニア音楽のコンサートなどが催された。

直近のレフカダからの報告では新しいハーン・ミュージアムにはうわさを聞きつけた島民が、次々と訪れ、市は1日に2度（午前と夕方）開館することを決定。地域の子どもたちもサマー・プログラムの一環で訪れているという。これこそ記念事業の成果だと思っている。ご尽力いただいたすべての方に感謝申し上げたい。

（島根県立大学短期大学部教授・記念事業実行委員長）

ハーンに関する国際シンポジウムに参画したパネリストや関係者ら＝ギリシャ・レフカダ

八雲の作品 朗読ライブ

俳優・佐野さんとミュージシャン・山本さん

来月松江で「魅力伝え続けたい」

文豪・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、1850～1904年）の没後110年を記念し、松江市出身の俳優佐野史郎さん(58)が同郷のミュージシャン山本恭司さん(58)と共に9月14日、八雲の作品の朗読ライブ「望郷～失われることのない永遠の魂の故郷～」を松江市内で上演する。八雲の生まれ故郷ギリシャで7月に初演し、国内初公演の地に松江を選んだ。「八雲は私にとっても、松江にとっても大切な存在。魅力を伝え続けたい」―。佐野さんの思いは深い。

小泉八雲について話す佐野史郎さん＝松江市殿町、山陰放送松江支社

「俳優になって40年。故郷にゆかりのある八雲は、同じ表現の道を志す人間として意識せずにいられなかった」。佐野さんの心は長年、八雲と共にあった。

佐野さんは小学1年の時、東京都から松江市に引っ越し、八雲を知った。両親や祖父母に怪談「耳なし芳一」や「雪女」を読み聞かせてもらい、「へるんさん」という愛称の印象は幼心に強く残った。

八雲が好き、という感覚とは少し違う。「当たり前に、そこに存在があった」。運命的な出合いだった。

高校を卒業し、上京。1974年に俳優になり、がむしゃらに役者の道を突き進んだ30代も、八雲の作品を読みふけった。「怪談だけでなく、虫から料理まで、好奇心旺盛にさまざまなものを究めた八雲に魅了されていった」という。

92年、八雲の新聞記者時代をたどるテレビ番組に出演。収録で米・シンシナティやニューオーリンズを訪れた。「八雲がたった一人で単一本で生き抜いた迫力を、現地に立って身をもって感じた」と振り返る。

小泉八雲の生誕地ギリシャ・レフカダ島での朗読ライブ。佐野史郎さん（左）と山本恭司さん（7月5日・共同）

八雲の魅力を伝えようと2006年、作品の朗読を全国各地で始めた。ライフワークに、という思いもあり構成を自ら立案。翌年からは盟友の山本恭司さんというパートナーも加わった。

八雲の生まれ故郷ギリシャのレフカダ島など2カ所で今年7月、実現させた朗読ライブのテーマは「望郷」。故郷を離れ、二度と戻ることのなかった八雲の代わりに、八雲の残した言葉を届けたい、という2人の思いがかなった。

佐野さんが日本語で『船幽霊』を演じ、「若返りの泉」などを朗読し、山本さんがギターで劇中曲を演奏。客席を埋めたギリシャ人などは盛大な拍手とスタンディングオベーションで、熱演をたたえた。「言葉を越えて八雲の作品がギリシャの皆さんに伝わった」。佐野さんは、取り組んできた朗読の意義を再認識できた。

驚きもあった。レフカダ島の景色は夕日、水辺、山並み、どれもが松江の景色と重なった。「八雲が松江を愛したのは、レフカダで母親と過ごした幸せな時間を思い起こさせるからではないか」。自分なりの「答え」を導き出した。

知れば知るほど、八雲に引き込まれていく。朗読ライブが、多くのファンとそんな思いを共有する場になることを願っている。

朗読ライブ「望郷～失われることのない永遠の魂の故郷～」 9月14日午後6時半、松江市西津田6丁目のプラバホール。一般前売り2千円（当日2500円）、高校生以下千円（当日1500円）。2部構成で、1部は八雲のひ孫・小泉凡さん(63)の講演。2部が朗読ライブ。問い合わせは松江市観光文化課、電話0852(55)5293。

平成 26 年 8 月 15 日付け・山陰中央新報

怖い話に心ドキドキ

暑い夜でも涼しくなれる

島根県立大短期大学部 岩田教授がお薦め作品

盆は過ぎたが、まだまだ暑さは厳しい。そんな夏の夜に、ゾクッとするような涼しさを感じさせてくれるのが「怖い話」。児童文学などに詳しい島根県立大学短期大学部（松江市浜乃木7丁目）の岩田英作教授(51)は、夏に読む怖い話を「心のかき氷」に例え、「怖い話を楽しみながら多くの作家、作品に出合ってほしい」と呼び掛ける。大人も子どももヒンヤリできる、岩田教授オススメの作品を紹介する。

親子で楽しめる作品として岩田教授が推すのは「怪談えほんシリーズ」（岩崎書店）のうち、夏におばあちゃんの家で暮らす男の子を描いた「いるの　いないの」（京極夏彦作、町田尚子絵、東雅夫編）。男の子は昔ながらの日本家屋で過ごし、すすけて黒くなった天井と梁を見上げるたび、「誰かがいるかも」と想像力と恐怖心を膨らませる。おばあちゃんには見えない、誰か―。想像が現実へと変わっていくストーリーに、大人でもページをめくる手が震えそうだ。

怖い話で忘れてはいけないのが、没後100年を迎えた松江市ゆかりの文豪小泉八雲の「怪談」だ。「耳なし芳一」「むじな」といった数ある作品の中でも、背筋が凍りそうなのは「雪女」（小泉八雲作、平井呈一訳、伊勢英子絵、偕成社）。吹雪の夜、2人のきこりの男が小屋で休んでいると、いつの間にか傍らに雪女が…。冷たい息を吹きかけて1人を殺した雪女は、もう1人の方に振り向き、ゆっくりと顔を近づけて―。雪の描写も多く、芯から涼しくなれそうだ。

一度に多くの話に触れたければ「ホラー短編集」（岩波書店）シリーズがおすすめ。エドガー・アラン・ポーや、「チョコレート工場の秘密」で知られるロアルド・ダールらの短編作品を収録。夢中で読みふけってしまう。

こうした「怖い話」として書かれた作品以外にも、見方を変えると恐怖感を掻びる物語もある。

岩田教授が挙げるのは、宮沢賢治の「注文の多い料理店」（島田睦子絵、偕成社）。獲物を求めて山へ狩に入った2人の紳士が、奇妙なレストラン「山猫軒」を見つける。料理にありつこうと準備をしていると、自分たちを食べようとしている獣の存在に気付く。岩田教授は「生態系の頂点にいるはずの人間が、いつの間にか食べられる側となり、命を脅かされる怖さが潜んでいる」と読み解く。

ドキドキしながらも、ページをめくらずにはいられない怖い話の世界。涼しさの感じ方は一様ではないかもしれないが、本の世界の魅力は誰もに伝わるに違いない。

夏の夜の風物詩の一つとして欠かせない「怖い話」

「怖い話は心のかき氷」と話す岩田英作教授＝松江市浜乃木7丁目、島根県立大学短期大学部

平成 26 年 8 月 16 日付け・山陰中央新報